

健康文化

身近な森林をめぐる保全問題

北川 勝弘

1 はじめに

近年、森林をめぐる環境問題がかなり社会的な関心を持たれ、マスコミでも頻繁に取り上げられている。世界的には熱帯降雨林の伐採問題が、また国内的には1993年に世界自然遺産に登録された青森・秋田県境の白神山地のブナ林の伐採問題などが、その筆頭株であろう。愛知県内でも、県北部のさほど広くない森林地帯が、最近にわかには脚光を浴びるようになった。瀬戸市の郊外にある「海上（かいしよ）の森」（面積約600ha）で、愛知県がこの森林地帯を会場として2005年に万国博覧会（愛知万博）を開催するという方針を掲げたことから、森林の開発・保全をめぐる、市民の熱い議論が戦わされている。

規模の大小や森林の質（内容）を別にすれば、同様の問題は日本の各地でたくさん発生しており、1987年のリゾート法（総合保養地域整備法）が施行されて以降、ゴルフ場やスキー場、観光施設の開発をはじめとして、森林開発の件数や速度に拍車がかかったことは周知の事実である。本稿では、私たちの身近に存在している都市近郊林の一例として愛知県春日井市郊外の里山を取り上げ、そこで起こっている森林開発問題を中心として、身近な森林の保全問題についてどう受けとめたらよいのか考えてみたい。

2 春日井市の里山開発問題

今年（1996年）の2月初旬の一日、春日井市在住の友人に招かれて「弥勒山麓の自然を守る会」主催の自然観察会に参加した。この友人は、愛知教育大学の先生をしていて、他に予定が無ければ毎週のように土曜か日曜には自宅付近の低山に登り、夏の本格的な登山に備えて足ならしをしているという、大の山好きで自然愛好者。その彼が、「愛知県（林務課）の里山に対する姿勢はおかしい」と、最初に私のところに憤慨して話しにきたのは、もう1年も前のことだった。

弥勒山は、愛知県春日井市の郊外にある標高437mの低山であるが、春日井市内では標高が一番高く、東海自然歩道が通っている。弥勒山一帯の林は、

常緑広葉樹と落葉広葉樹が混在する雑木林で、典型的な二次林である。民家に比較的近い場所に存在し、住民の暮らしと結びついている森林という意味で、奥山に対して普通、里山と呼ばれる。また、都市から近い場所に存在する森林という意味では、都市近郊林とも呼ばれる（都市近郊林は里山の一部である）。面積はけっこう広く、遠望すると落ちつきのある緑のカーペットといったおもむきがある。愛知県は、この一帯の県有林内にオートキャンプ場を整備するため林道整備を行う必要があるとして、既設林道の拡幅とその終点から山頂付近までの新設を計画し、林道新設予定地域の樹木伐採が既に行われている。

友人に請われて同行した自然観察会には、主婦や家族連れを中心に50人くらいの人たちが参加していた。私の研究の専門分野は、森林利用学、林業工学（森林土木計画学）であるが、その立場から愛知県による林道の付け方に問題が無いのかどうかを見て欲しい、というのがわが友人の私への要望であった。身近な自然の開発・保全をめぐる問題に、これほど多数の人々が関心を寄せていることを知って、正直のところ大変びっくりし、また心強くも感じた。私は、木材の合理的な伐採・搬出計画の方法論に関する研究分野を専門としており、いわば「森林開発を行う側」の問題意識を研究の前提にしている者であるが、学生時代にワンダーフォーゲル部に所属していたこともあって、自然保護・保全問題には比較的敏感な方であると自負している。

見学した弥勒山麓の林道の技術的な問題点自体については、本稿の目的から外れるので省略するが、林道の必要性や計画された林道の規模（道幅や舗装の具合）の如何については、友人の危惧はもっともであり、確かに一考を要するところがあると感じた。

そもそもの問題点として、森林の開発・保全をめぐる問題に対して、行政側は住民の意向をどのように把握して施策に反映すべきか、ということが挙げられる。弥勒山麓の森林の取り扱い方をめぐっては、行政側はまず、長期的に見てオートキャンプ場としての開発（および、林道建設）が住民にとって望ましいのか、自然探索用の遊歩道を整備し歩行による自然との触れあいを増やすようにすることが望ましいのか、森林に対する「住民の要求」の所在を正確に知る必要がある。とりわけ、この対象地の森林が公共の財産である「県有林」であれば、なおさら行政側としては、地元住民を始めとする県民の多数意思を把握する際に、住民自治を最大限に発揮する方策を工夫する必要があるだろう。ただし、その際に、森林の取り扱い方に関する計画の立案権限を持つ行政側には、雑木林の持つ今日的な価値についての認識が求められる。

3 雑木林の今日的な価値

雑木林は、わが国の燃料エネルギーが石炭、石油に置き換えられた「エネルギー革命」（昭和30年代はじめ）以前には、薪炭材として20～30年くらいの周期で伐採され、経済的にも有用性を保っていたが、その時期以降、経済的な価値が著しく低下すると共に、林業的には採算にあわなくなり、手入れされることもなく放置されつ放し、荒れ放題となってしまったものが多い。

その後、高度経済成長期を経て、農村地域から都市への人口集中が強まり、「過密の都市と過疎の農山村」の図式がわが国の特徴となったが、そうした過程で、都市、とりわけ人口が極端に集中した大都市の住民のなかから、人工的な建造物に囲まれ、殺伐とした都会生活に満ち足りず、自然との触れあいを希求する声が強まってきた。都市住民の「緑」に対する憧れ、希求が根強い要求（社会的なニーズ）となるに伴い、かつては大方の人たちから見向きもされなかった里山の雑木林に対しても、人間の日常的な生活環境を守るうえでの役割が期待されるに至ったのである。

今日、都市住民の多くが都市近郊林に期待しているものは、当然のことながら経済的なものではなく、生活環境の保全上の効果であろう。種々の国民意識調査によっても、森林が存在することで精神的やすらぎを感じずる人が大勢いることがわかる。都市に住む多くの人々にとって、森林一般とはいかないまでも、少なくとも都市近郊林は、心に潤いを感じさせてくれる憩いの場であることが期待されている。そうであれば、二次林として残されている都市近郊林については、スギ、ヒノキを主体とした木材生産林として転換するよりも、二次林のまま（すなわち、雑木林のまま）、生活環境保全林として適切な取り扱いをすることが望ましいだろう。かつては、木材生産の経済性の点で劣るために誰からもほとんど見向きもされず、単に開発の対象地としてのみ見なされてきた雑木林が、今や新たな位置づけを与えられるに至った。雑木林の今日的な価値、それは都市住民にとっての精神的な慰安の場として不可欠な存在である。

4 里山保全に向けて

『朝日新聞』（9月11日付け）によると、愛知県はこの9月の県定例議会に、「里山自然地域保全事業費」として1,000万円の補正予算を計上し、里山についての本格的な調査を初めて実施するそうである。海上の森の万博計画でも注目されている里山に対して県の関心が低い、という自然保護団体などの指摘を受けたことから、県内全域を調べることにしたという。具体的には、今年度の調査項目として、植生や地質、遺跡の有無、探鳥会の実施状況などをあげ、里

山の現状を把握する他、市町村の土地利用計画のなかでの位置づけや、保全計画があるかどうか調べ、さらに、住民の意識調査を行って、里山とのかかわりの実態や、里山に期待する気持ちも聞くという。その報道記事は、最後に、次のように結んでいる。「里山は、・・・暮らしのなかで人々が『ふる里』のイメージとして思い浮かべる場所でもあり、最近では、身近で多様な生態系をはぐくむ場所として重要性が見直されている。」

“泥縄式”の感は拭えないが、そして「住民」の範囲をどのように定義するのか、などの問題点があることはさておくとして、こうした実態調査は当然、必要なものである。この機会に、愛知県下の里山の現時点における全体的な実態を明らかにすることは、将来に向けて貴重な資料を蓄積することになるわけで、その成果をおおいに期待したいものである。

話は変わるが、本年4月に、日本自然保護協会と世界自然保護基金日本委員会により、「植物群落レッドデータ・ブック」が発行された。なんらかの保護が必要な日本国内の植物群落 7,492 件がリストアップされているもので、世界でも初めての試みだという。日本自然保護協会の責任者によれば、この「植物群落レッドデータ・ブック」を発行した理由は、「原生林など、めったにないものが大切なことは誰にでもわかるが、もっと身近な植物群落の重要性についても強調しておきたい」ためだ、という。

先述した愛知県春日井市郊外にある里山の雑木林は、幸いこのレッドデータ・ブックには掲載されていない。ということは、この里山は、ごく普通の平凡な雑木林であることを意味する。しかし、今日、取り立てて貴重な動物、植物のいない平凡な雑木林であっても、それがごく普通の状態で存在していること自体が、多くの都市住民にとって、日常的な都市生活のなかで感ずる様々な精神的ストレスを癒し、精神を安定させるうえでの無くてはならない存在となっているのである。従って、たとえ平凡な森林であっても、無用な開発は極力避けて森林の環境を良好に保全することが、今日における里山の雑木林との最も賢明なつき合い方だと言えよう。ここで、「開発」とは、森林を他の用途に変更することを意味するが、「森林環境の保全」とは、雑木林を全く手付かずのまま放置しておくことを意味しない。雑木林であっても、里山を人間にとって良好な状態に維持し続けようとするなら、人間による一定の制御（伐採を含む定期的な手入れ）は必要不可欠なものなのである。

(名古屋大学農学部助教授・資源生物環境学科)